



# よつば会だより

2023年11月号

発行:NPO法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

新聞の投稿欄で見つけた記事ですが、台湾の人が「台湾では夏の暑い日が長く続いた後、急に冬になる感じで、秋や春を実感できる期間はわずかしかない。四季がある日本がうらやましい」と語っていたそうです。これを聞いて、投書者は、今年の日本は台湾の気候に似てきていると感じたと書いていました。確かに、今年の日本の暑さは、彼岸花が秋の彼岸を過ぎても開花しなかった状況だったように、暑い日が長かったのですが、日本もこれから台湾のように四季感が薄まっていくのでしょうか。



## 全国から注目を集める画期的な取り組み 「こころサポート事業」への雑感



今年の6月に、広島市南区の精神障害者を抱える人の家族会「みどり会」で、尾道の西川浩司さんが「こころサポート事業」というテーマで話されました。その話を聞いたみどり会会員の方の感想文が、みどり会報7月号に同封されて届きました。その感想文がとてもいい文章だったので、みどり会の了承を得て、よつば会だより9月号の記事として掲載しました。

私が「こころサポート事業」について、西川さんから話を聞いたのは、平成31年1月によつば会家族教室で話をしてもらった時の内容の一つとしてでした。そのときは、初めて聞く内容の話で、対象者が精神障害を抱えた人で、未受診の人、医療を中断している人、頻回入院の人などとなっていて、尾道にも対応の難しい精神障害者がかなりいるのだろう、そういう人への対応を西川さんが始めたのだな、しかし、よつば会の会員の方々につながる話ではないぐらいに受け止めていました。次に「こころサポート事業」についてニュースが入ったのは、昨年広島で行われた「みんなねっと広島大会(全国大会)」の基調講演の要約が「みんなねっと」誌今年の1月号に掲載されていて、そこに次のような文章を見つけたときでした。

**「広島県の尾道市で行われているアウトリーチ支援では、行政のアウトリーチ担当者と福祉事務所と医療機関などが、一人一人の状況に合わせてチームを組んで訪問する取り組みが行なわれていて効果を上げており、尾道モデルとして全国から注目されています」**

西川さんを中心にした尾道市のアウトリーチの取り組みが、全国から注目されていることなど全く知らなかった私ですが、取り組みが効果を上げていることに、さすがは西川さんだと心の中で拍手を送りました。

そして、「みどり会会報」今年の6月号で、西川さんがみどり会で「こころサポート事業」について話されることを知りました。その話をみどり会会員の方々がどう受け止めたかを知りたいと思い、その旨を会長に伝えました。その結果が、よつば会だより9月号の二面に掲載したみどり会会員の方の文章でした。その文章には、尾道の「こころサポート事業」の活動に驚き、感銘したと、賞賛の言葉がつつられていました。西川さんのこれまでの精神障害福祉への献身的な取り組みが、尾道市行政をも動かしたのだと思っています。

よつば会会員の方々も高齢化も手伝って、親子ともにサポートが必要な状況になっています。よつば会会員のお子さんが「こころサポート事業」の対象者になることになれば、親もかなり安心できるでしょう。

みどり会会員の方の文章に、西川さんが「希望者には精神科医療が届けられる仕組みがあるといい」と話していることが書いてありましたが、私も同感です。西川さんの持つストレングス視点などに共感を持った医師の参加です。 そうなると、もう一段内容の高まった「こころサポート事業」となるでしょう。 (N.T)

### 10月の活動報告

- 08日 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 22日 家族教室 (市民センターむかいしま)

### 11月の活動予定

- 12日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 19日(日) よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)





## ～「人を診ない」で「病を診る」傾向を憂う～ 当事者の病に至る物語に耳を



認定NPO法人「**地域精神保健福祉機構・コンボ**」が発行しているメンタルヘルスマガジン「こころの元気+」が、今年の10月号で創刊200号を迎えました。同誌では毎月特集記事を組んでいます。10月号の特集記事のテーマは「生きづらさをひも解く」でした。特集記事は精神障害者の生きづらさに関して、11項目にわたり取り上げています。そのすべてが家族の方や当事者に読んでもらいたい内容ですが、ここではその中の一つ、コンボの代表で精神科医でもある伊藤順一郎さんの「経験者が主観で語る『精神疾患』の世界、それがなぜ大切か？」というタイトルの記事を紹介합니다。伊藤さんは、記事の冒頭で次のように書いています。

「今、私がおそれていることがあります。杞憂であればいいのですが、それは、精神科医療関係者に『人を診ないで、病を診る』という傾向が強まっているのではないかとということなんです」

そして、その恐れ 배경には大きな3つの理由があると説明しています。

**一つ目の理由**は、どのような症状が今いくつあって、それがどのくらい続いているかということ調べて、それをもとに診断を決めるというやり方です。もともとは、精神科医の診断が人によってまちまちなので、ベテランでも新人でも同じように診断ができるようにと作られた方法ですが、安易に使われると、病に至るいきさはすっ飛ばして、今どのような症状があるかだけに、医師の関心が向くようになってしまいます。

**二つ目の理由**は、特に日本では、診療時間がとても短いのがいまだに一般的な風潮になっていることです。これと一つ目の理由を掛け合わせると「短時間で症状を数え上げて、それに見合った薬を出すことが精神科医の仕事だ」という勘違いが生まれてしまいます。

**三つ目の理由**は、診察室や病棟など特別な場所でしか本人に会わないという態度が、なかなか改まらないということがあります。とりわけ病棟という場所では「その人がどんな暮らしをして生きてきたのか」がわかりにくい。その「人」の姿が見えにくいのです。けれど私たちは、「人」を見る、あるいは知ることなしに「病」を見ることができのでしょうか。私の答は否です。なぜなら精神の病とは、人の暮らしの中で生じてしまった苦しさや落胆、絶望などと深いつながりがあるだろうと思うからなんです。

伊藤さんは、この3つの理由を、精神科医療関係者に「人を診ないで病を診る」という傾向が強まっているおそれがあり、その背景にあるものとして述べています。しかし、私はおそれを通り越した、多くの精神科医療関係者が陥っている悲しい現実そのものだと思っています。伊藤さんはさらに続けています。

「一人ひとりに病に至る物語がきっとあります。それは、その人の限界を超えて無理を強いられ、精根尽き果てたという物語かもしれない。孤立という状況に追い込まれ、怖くて、そのことを誰も分かってくれなくて『もう死ぬしかない』と思っている物語かもしれない。百人いれば百様の物語があるはずなんです。病に至る事情をわからずして、どうして、人は人を支えられるでしょう？薬を差し出すためだけだったら、病の姿だけを知ればいいのかもかもしれません。だから私たちは、お互いにまず人の話に耳を傾けようじゃありませんか。そういう『わかって』とする姿勢があって、初めて人は人とつながり続けられると思うのです。そのつながりがなければ、人は希望を持ってないんじゃないでしょうか。科学も医学も冷たい道具のままじゃないでしょうか」

伊藤さんの文章の内容が濃く、カットする部分がなく、ほとんど全文借用の原稿になってしまいました。(N.T)